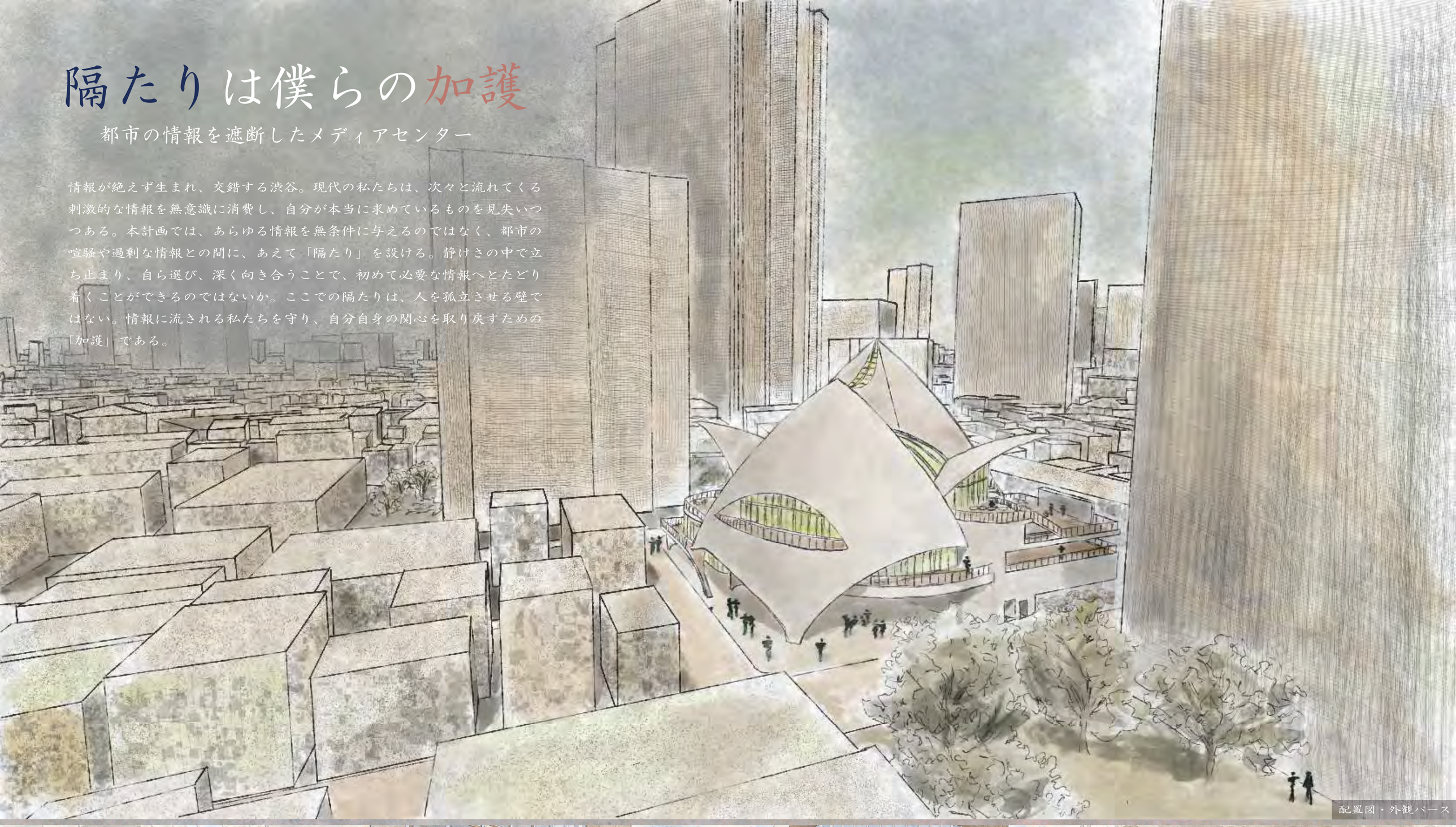
隔たりは僕らの加護

都市の情報を遮断したメディアセンター

情報が絶えず生まれ、交錯する渋谷。現代の私たちは、次々と流れてくる刺激的な情報を無意識に消費し、自分が本当に求めているものを見失いつつある。本計画では、あらゆる情報を無条件に与えるのではなく、都市の喧騒や過剰な情報との間に、あえて「隔たり」を設ける。静けさの中で立ち止まり、自ら選び、深く向き合うことで、初めて必要な情報へとたどり着くことができるのではないか。ここでの隔たりは、人を孤立させる壁ではない。情報に流される私たちを守り、自分自身の関心を取り戻すための「加護」である。

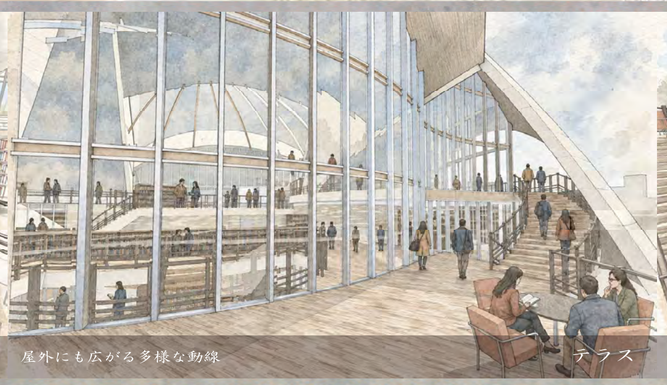


配置図・外観パース



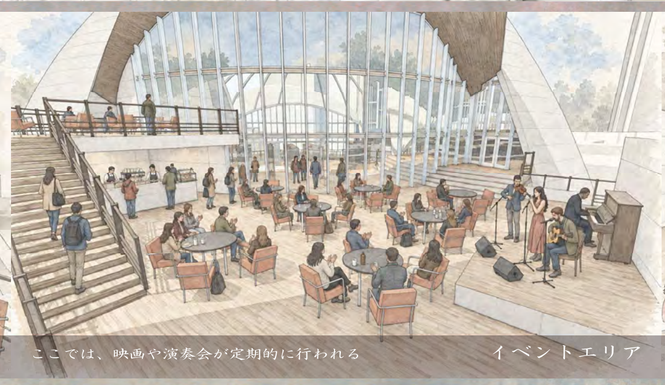
交差するスラブが人との交流のきっかけを生む

アトリウム・一般開架書庫



屋外にも広がる多様な動線

テラス



ここでは、映画や演奏会が定期的に行われる

イベントエリア



子どもの好奇心に注ぐため動線に回遊性を持たせた

子どもライブラリー

■ 敷地情報



渋谷駅周辺は、複数の鉄道路線が集まり、人・文化・広告・デジタル情報が絶えず行き交う都市である。駅の南西に位置する桜丘町は、起伏のある地形と国道246号によって駅前の繁華街から隔てられ、かつては住宅や個人商店が並ぶ、生活の気配を残した地域であった。

1980年代以降はマンションやオフィス、飲食店が増加し、現在は大規模な再開発によって駅との接続が進められている。一方で、その利便性の向上は、駅前から流れ込む情報や都市の刺激をさらに強めている。

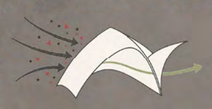
■ コンセプト

01 都市の情報の氾濫



渋谷では、広告やSNSなどの情報が絶えず人へ流れ込む。私たちは情報を選んでいるようで、実際には流れてきた情報を受動的に消費し、本来の関心を見失いつつある。

02 都市の情報の氾濫

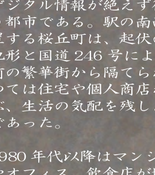


建築の外皮は、都市から流れ込む情報を受け止め、その量と速度を調整する。隔たりは都市を拒絶する壁ではなく、人が情報と適切な距離を保つためのフィルターとなる。

03 孤立した思考

情報から一度離れることで、人は立ち止まり、自分が本当に求めているものと向き合う。静けさと光に包まれた空間が、思考を取り戻すための余白となる。

04 自ら情報を選択する



自分の関心を確認した利用者は、本・デジタル情報・他者との対話から必要なものを自ら選び取る。情報の主導権を取り戻し、新たな視点を持って再び都市へ向かう。

■ ダイアグラム

01 コンセプトダイアグラム



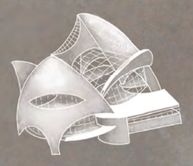
思考する余白のない社会



外部の「人から生まれる情報」を隔てて、「自然からなる情報」のみを取り込む

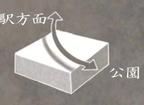


洞窟のような自然体の造形を取り入れる



外部を隔て、内部を閉放的にすることで自分のための新たな情報と出会うことができる

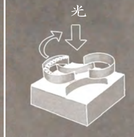
02 平面ダイアグラム



公園から駅方面へぬける動線計画



道中にカフェ・アトリウムを設け、とどまるきっかけを作る

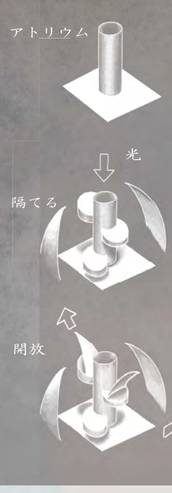


隔たりの壁を設けつつ、光を取り入れて自然体の空間を構築した



内部で交互に交わるスラブが情報の交差を招く

03 立方ダイアグラム



中心にアトリウムを設ける

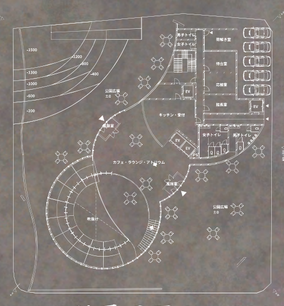
隔てるための障壁を設ける

自分を開放する

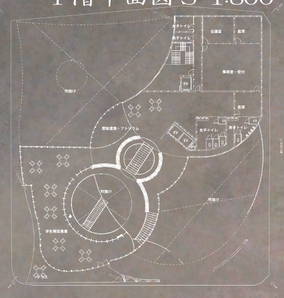
04 隔たりが作る体験

本計画のダイヤグラムは、都市から流れ込む過剰な情報に対し、建築が「隔たり」をつくり、人が情報を自ら選び直すまでの過程を示している。コンセプトダイヤグラムでは、広告やSNSなどの情報に囲まれた状態から、建築の外皮による遮断と濾過、空間での思考、必要な情報の選択へと移行する体験を表した。平面ダイヤグラムでは、書架や床のずれによって性質の異なる居場所を点在させ、回遊しながら自分に適した距離と情報を選べる構成としている。各階は、1階の都市との接点、2・3階の集中と発見、4階のイベントによる共有へと展開する。立面ダイヤグラムでは、曲面状の外皮と限定された開口によって都市の視線や刺激を和らげながら、内部の活動や光を部分的に街へ伝える。断面ダイヤグラムでは、連続する吹抜けとトップライトが自然光や人の気配を各階へ届け、空間を隔てながらも緩やかなつながりを生み出す。最上階では、全方位のテラスとそれらを結ぶ階段により、利用者が気分を切り替え、異なる景色を選びながら都市と向き合い直す。ここでの隔たりは、人や街を拒絶する壁ではなく、情報に流される人の思考と選択を守り、再び都市へ開くための加護として機能する。

■ 平面図



1階平面図 S=1:800



2階平面図 S=1:800



3階平面図 S=1:800



4階平面図 S=1:800

カフェ、レストラン、雑誌コーナーを配置し、街から誰もが気軽に立ち寄れる階とした。都市に最も近い場所でありながら、外部から内部へ進むにつれて視線や音、情報量が緩やかに変化する。都市を完全に閉ざすのではなく、必要な情報だけを内部へ導くフィルターとして機能する。



学生向けの書架と学習スペースを配置し、情報と落ち着いて向き合える階とした。吹抜けを介して下階の活動や人の気配を感じながらも、直接的な干渉を抑え、個人の集中を守る。書架や床のずれによって小さな居場所を点在させ、利用者が自分に合った距離と環境を選べる構成とした。

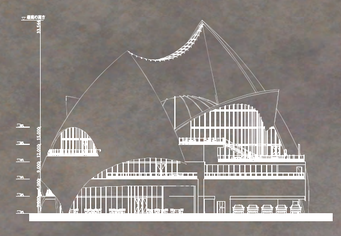


子どもライブラリー、一般書架、閲覧室を配置し、世代を越えて情報に触れられる階とした。子どもライブラリーには工房室や授乳室を併設し、親子が安心して滞在できる環境をつくる。静かに読む場所と、会話や制作を通して知識を共有する場所を分け、必要に応じて交流と集中を選択できるようにした。

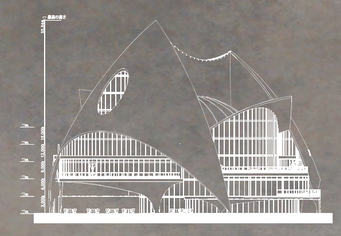


イベントエリアを中心に配置し、展示や講演、ワークショップを通して、人々が知識や考えを共有できる階とした。外周には全方位へ開かれたテラスを設け、情報や人との関わりに疲れたときには、いつでも外へ出て気分を切り替えられる。各テラスは外部階段によって連続し、移動するたびに異なる方向の街並みや景色と出会う。都市を一方的に眺めるのではなく、自ら場所と視点を選びなが

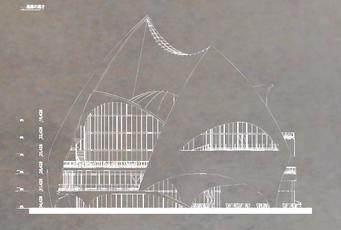
■ 立面図



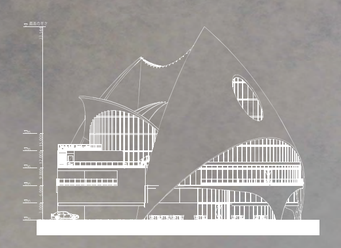
東側立面図 S=1:800



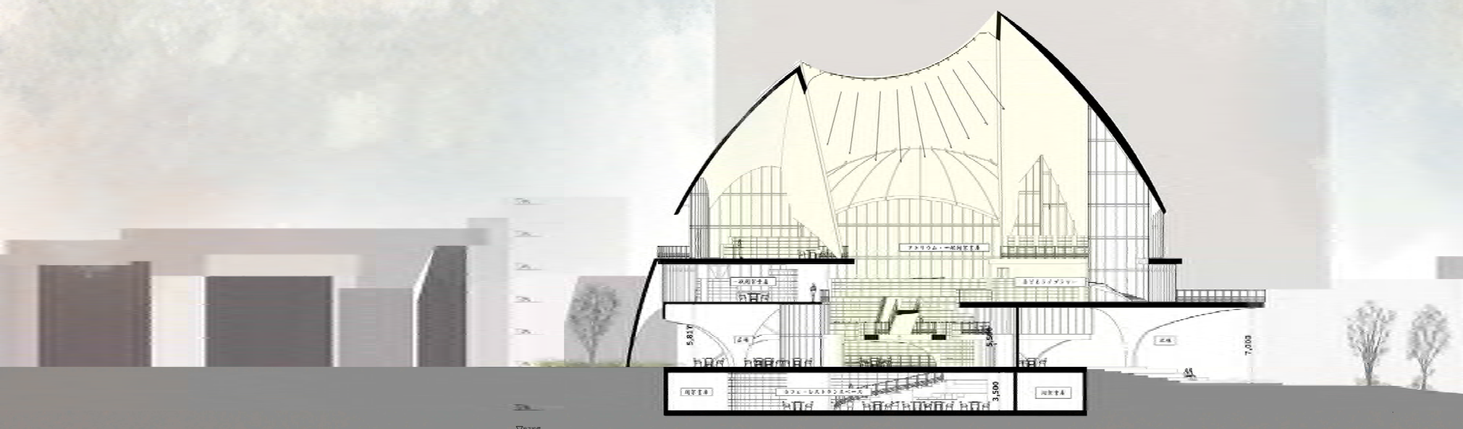
西側立面図 S=1:800



南側立面図 S=1:800



北側立面図 S=1:800



断面図　S=1:400

■ マテリアル計画

本計画では、「隔たりは、僕らの加護。」というコンセプトを、外部と内部で異なる素材の表情によって表現した。外壁には打放しコンクリートを用い、情報や刺激が絶えず行き交う都市に対して、冷たく閉じた印象を与えている。この重厚な外皮が都市の喧騒を受け止め、内部に静かな環境をつくる。一方、内部の天井には暗めの木材を使用し、視線を包み込むことで落ち着きと安心感を生み出す。床には明るい木材を採用し、柔らかな光を反射させながら、人の移動や滞在を緩やかに導く。天井と床の明暗差によって、内部に奥行きと居場所のまとまりをつくり出した。また、選択的に設けた開口部にはカーテンウォールを採用し、自然光や街の景色、人の気配を内部へ取り込む。コンクリートによって都市との隔たりをつくりながらも、必要な場所では透明な境界を介して街とつながる。閉鎖と開放、冷たさと温かさを共存させ、情報との距離を利用者自身が選べるマテリアル計画とした。

■ これからの社会へ

これからの社会では、情報技術の発達によって、私たちは今以上に多くの情報へ瞬時にアクセスできるようになる。一方で、流れてくる情報を無意識に消費し、自分が本当に求めているものや、立ち止まって考える時間を失う危険も大きくなる。本計画は、情報が交錯する渋谷において、あえて都市との「隔たり」をつくるメディアセンターである。コンクリートの外皮が街の騒音や視線、過剰な刺激を受け止め、内部では暗い木の天井と明るい木の床が、人を包みながら静かな滞在へ導く。選択的に設けたカーテンウォールは、自然光や景色、人の気配を必要な分だけ内部へ取り込む。利用者は書架や床のずれによって生まれる居場所を回遊し、自分に適した距離を選びながら情報と向き合う。吹抜けは各階を緩やかにつなぎ、集中を守りながら他者の存在を感じさせる。1階では都市の情報を受け止め、2・3階では学習や読書、制作を通して関心を深め、4階ではイベントによって知識や考えを共有する。全方位に設けたテラスでは、気分を切り替え、異なる景色を選びながら再び都市と向き合う。この建物は、情報を一方的に与える施設ではなく、人が情報との距離を調整し、自分の意思で選び直す力を養う場所となる。ここで得た知識や新たな視点は街へ持ち帰られ、人と人との対話や創造へつながっていく。隔たりは人を孤立させる壁ではない。過剰な情報から思考を守り、再び社会へ開くための加護として、これからの都市に必要な居場所となる。